論 文 の 内 容 の 要 旨

論文提出者氏名	小林　聡
論文審査担当者	主　査　　竹下　敏一 副　査　　副島　雄二 ・ 田中　直樹 ・ 横山　純二

論　文　題　目

Efficacy and safety of eradication therapy for elderly patients with helicobacter pylori infection
（高齢者に対するヘリコバクター除菌療法の有効性と安全性について）

（論文の内容の要旨）

【背景と目的】　*Helicobacter pylori*(*H. pylori*)は慢性胃炎、胃十二指腸潰瘍、胃癌、MALT リンパ腫と関連する最も一般的な細菌であり、治療として除菌療法が広く行われている。成人では除菌療法の有害事象は軽度で頻度は少ないと報告されているが高齢者では検討されていないため、今回、高齢者に対する *H. pylori* 除菌療法の有効性と安全性を検討した。

【方法】　2013 年 1 月から 2017 年 12 月に北信総合病院で *H. pylori* 除菌療法を施行した 1276 名を対象として後方視的観察研究を実施した。データが不足している 5 名を除外した 1271 名について 65 歳未満を若年群、65 歳から 74 歳を高齢群、75 歳以上を超高齢群と 3 群に分けて検討を行った。血清抗体価、尿素呼気試験、便中抗原検査、病理組織学検査のいずれかで陽性と判定されたものを *H. pylori* 感染と診断した。全症例で除菌療法前に上部消化管内視鏡検査を行った。治療レジメンは 3 剤併用療法で、1 次除菌を施行し 4 から 8 週間後に尿素呼気試験を行い、陽性と判定された場合は 2 次除菌を施行した。尿素呼気試験で治療効果を判定した。有害事象の有無、内容についてカルテベースで確認した。

【結果】　対象患者 1271 名の年齢中央値は 61 歳、男性が 730 名であった。除菌療法を施行した背景疾患として慢性胃炎 77.0%、胃十二指腸潰瘍 16.4%、胃癌治療後 5.4%であった。1 次除菌施行 1133 名中、除菌成功率は 92.1%、有害事象発現率は 9.1%、2 次除菌施行 146 名中、除菌成功率は 84.2%、有害事象発現率は 8.9%であった。有害事象の内訳としては下痢が 51.7%、皮疹 12.9%、便秘 7.8%を認めた。14 名は皮疹のため治療を中断した。若年群(791 名)、高齢群(347 名)、超高齢群(133 名)の 3 群における除菌療法について検討すると超高齢群は他の 2 群と比較して慢性胃炎に対する施行率が有意に低く、胃十二指腸潰瘍と胃癌治療後に対する施行率が高かった。除菌成功率、有害事象発現率に違いは認めなかった。

【考察】　超高齢者は若年者と比較して除菌成功率、有害事象発現率に有意差が無いことから高齢者に対する *H. pylori* 除菌療法は有効で安全であることが示唆された。一方、超高齢者では慢性胃炎に対する除菌療法の施行率が少ないことから有害事象の危険性を懸念して除菌療法を導入されていない可能性が明らかとなった。また、*H. pylori* の感染経路はまだ完全には分かっていないが家族内感染の報告もある。拡大家族では超高齢者にも除菌療法を行うことで、小児への感染を防止できる可能性がある。

【結論】　*H. pylori* 感染症に対する 3 剤併用療法は高齢者にも有効で安全である。